

# 第1章 研究の基本的な考え方

## 1 研究主題設定の理由

最近のいじめ問題の特徴として、いじめの内容や方法が暴力化・陰湿化し、集団化しているという傾向が見られる。現在のような深刻ないじめを引き起こしている背景には、児童生徒を取り巻く社会環境が変化し、子どもの戸外での遊びや異年齢集団による遊びの減少などがある。そのため、集団のきまりや集団の一員としての自覚や責任感などを身に付ける機会が少なくなってきた。また、核家族化や少子化の傾向のため、人とのかかわり方が十分にされていないことや親の過保護、過干渉が自主性や社会性を身に付けることを阻害している。そのため、円滑な対人関係をもつことが苦手であり、他人に対する思いやりや共に生きる行動規範が十分に身に付いていない。

また、文部省の「児童生徒のいじめ問題等アンケート調査」によると、いじめられた経験のある子どもは、小学生、中学生、高校生の順に、22%、13%、4%で、いじめた経験のある子どもは同じく、26%、20%、6%という結果である。この中で、「今いじめている」と答えたいうち、過去にいじめられた経験をもつ子どもは、小学生で65%、中学生、高校生でも40%をしめている。現在も進行する形で、いじめる側、いじめられる側両方の立場にある子どもも、小学生は20%である。このようにいじめる側といじめられる側の境界線がはっきりしない。さらにいじめた子どもに、いじめられた子との関係を聞いた質問では、「前から仲が悪かった」は20%に満たなかった。特に、女子では「仲のよい友達だった」の割合が高かった。ごく普通の関係、あるいは親密な関係から突然いじめに転化する様子がうかがえる。

一方、いじめに関する実態調査及びいじめに対する見方や考え方の意識調査でも、本音を出せない交友関係にあり、相手への思いやりやいたわりの気持ちが薄れていることなどが明らかになった。このように児童生徒間の人間関係の希薄さが、いじめを起こす要因になっているのではないかとと思われる。

そこで、本研究では、いじめ問題の対応を中・長期的にとらえ、相互の人間関係の改善が図れるような集団アプローチとしての構成的グループ・エンカウンター、ロールプレイングの実践を試み、集団のよりよい人間関係づくりの在り方を考察しようと考えた。さらに、いじめ問題解決のためのピア・カウンセリングの実践を通していじめ問題解決の方策を探ろうと考えた。

## 2 研究のねらい

- (1) いじめに関する文献、先行研究等の研究により、いじめの背景、要因及びいじめが起こるメカニズムを明らかにする。
- (2) 児童生徒のいじめの実態調査と教師のいじめに関する指導・援助状況調査により、いじめの実態や教職員のいじめに関する対応の現状を把握する。
- (3) 児童生徒、教職員のいじめに関する考え方や見方の意識を明らかにする。
- (4) 構成的グループ・エンカウンター、ロールプレイングの実践を通し、児童生徒のよりよい人間関係を深める指導・援助の手だてを明らかにする。
- (5) ピア・カウンセリングの実践を通して、いじめ問題解決の方策を探る。

### 3 研究の体系

